

茨城県北部の弥生土器——十王台式土器——

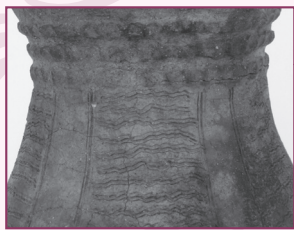
じゅうおうだいしきど

今回は、市内の遺跡から発見された、県北部に分布する弥生土器を紹介いたします。

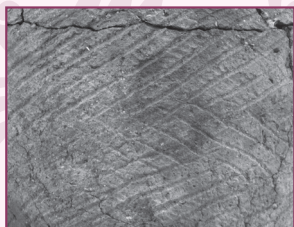
弥生時代の終わり頃の2〜3世紀代、県北では「十王台式土器」と呼ばれている土器が使われました。発見された日立市の十王台遺跡にちなんで命名されました。この土器は、県の中央部から北部を中心に分布し、特に那珂川や久慈川の下流域に多く見られます。



市内出土の十王台式土器(原田遺跡群)



十王台式の文様(粘土紐と櫛描文)



胴に付けられた縄目の文様

この頃、県北では十王台式土器、土浦市や石岡市周辺は上稲吉式土器、県西は二軒屋式土器と呼ばれる、文様などが異なる土器群を使う文化圏が形成されていきました。土浦市周辺は十王台式土器文化圏ではありませんが、天の川流域にある原田遺跡群(紫ヶ丘ほか)などで発見されています。

十王台式土器は、壺や高杯が主な種類です。壺の特徴をみてみましょう。口は大きく開き、頸はしまり、胴の膨らみの弱い特徴的なプロポーションです。高さ30センチメートル程度の標準サイズは煮沸用、大型は貯蔵用、小型は祭祀用として使われたと思われます。模様をみると、頸の上部には3本程度の粘土の紐が貼り付けられ、指や工具で押さえつけています。その下には、櫛描文と呼ばれる縄目の文様が、胴には、縄目の文様が付けられています。

土浦市周辺で使われた上稲吉式土器と比較してみましよう。この土器も壺が多く、こぶ状の突起を付いたり、頸の部分を無文にするなどの特徴があります。櫛描文はなく、胴の縄目も十王台式土器とは異なっています。

では、なぜほかの地域の土器が発見されるのでしょうか。どの時代も、地域間の交流があり、土器などの道具が持ち込まれています。十王台式土器をみると、栃木県や千葉県、遠く群馬県や長野県などでも発見されています。手に入れたモノを求めて、その地へ向かったのでしょうか。

十王式土器が持ち込まれた原田遺跡群からは、ほかに、栃木県、千葉県や埼玉県などの土器が発見されています。他地域の土器の発見は、活発な地域間の交流をうかがうことができます。これらの地域から人々が来る要因としては、モノを求めて、移住、婚姻、移動する人々の中継地となっていたことなどが考えられます。原田遺跡群の十王台式土器は、どのような目的でこの地にもたらされたのでしょうか。

今回紹介した弥生土器は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて、8月末まで展示しています。ぜひご覧ください。

関上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎026・7111)



土浦市周辺で使われた上稲吉式土器(原田遺跡群)